

岩波書店『寺田寅彦全集』と講談社学術文庫『天災と国防』



ふるさと Something NEWS

第46回

寺田寅彦『天災と国防』を題材として ——安全な“居場所”をつくる

一般社団法人 洗楓座
一般社団法人 e f c o . j p
代表理事 佐藤建吉

▼居場所の確保

「地方にこそ書籍文化の拠点が欲しい」。これは、2年前の夏、本連載

コラムで紹介した、軽井沢の「ブック&カフェ」に掲げた主題であった【註1】。

今年11月21日、そのブ

▼書籍文化の再生

文芸やアートは、この場合に効果的なメディアである。ここで共通するのはデザインする力である。本や書籍は、書き手と読み手のキャッチボールである。書き手は、推敲し記録する。読み手は、それを享受する。本の読み方も多彩であるが、個人としての精読からグループでの朗読もあり、朗読会というイベントもある。またラジオでの朗読に聞き入る場合もある。

▼朗読会&トーク会

軽井沢書店のブック&カフェは、店内に併設されており、本を読み、インターネットをし、友達と会話できる珈琲の香り流れる「居場所」である。

寺田は末尾に述べている。「昆虫や鳥類でない愛国心の発露にはもう少しちがった、もう少し合理的な様式があつてしかるべきではないかと思う次第である。」が、活かされてはいない。

【註1】新エネルギー新聞第110号11面(2018年8月6日)「地方にこそ書籍文化の拠点が欲しい」



山川建夫氏の朗読(軽井沢書店)

【註2】岩波書店、『寺田寅彦全集』(第五巻、昭和25年9月5日発行)、ページ176~188) 【註3】講談社、『天災と国防』(2011年6月9日発行、ページ9~24)

▼軽井沢のもつ表情

浅間山の麓に位置する軽井沢は、避暑地としても、別荘地としても日本の代表である。そこに住んだ文化人や著名人が時を刻んできた歴史があり、建物や足跡の「表情」がある。

夏には、たくさんさんの観光客が訪ね、特に旧軽井沢では老弱男女が愉しげに、ケータイやデジカメの姿は、その情報源への向かい「表情」をつくる。

軽井沢のこうした表情を育んできたのは自然であった。浅間山は稜線は穏やかであるが、噴煙や噴石をしばしば繰り返す。災害への警鐘を鳴らす。これも、隠れた「表情」である。

居場所は、やはり個人の生活の中にある。したがって、真の居場所とは？を探さなければならぬ。情報からの受身の姿勢は、その情報源への依存体質をつくる。自ら情報が発信する気概を持たなければならぬ。これは、東京を中心とする体制から地方への関心を促す効果を生むだろう。地方に魅力ある居場所をつくることのできる

筆者は朗読会を、昨年2019年11月に東京の江戸川区で、今年10月に東京の渋谷区で開催した。いずれも、社会性をとらえた詩人・芥木の朗読会であり、これに音楽を加えパフォーマンとした。そして、今回11月、防災についての朗読会を、軽井沢のブック&カフェで開催した。

このイベントは、朗読に掲げた素材と朗読者の力量が共感し、聞き手と

連載・イベント

【註1】新エネルギー新聞第110号11面(2018年8月6日)「地方にこそ書籍文化の拠点が欲しい」

【註2】岩波書店、『寺田寅彦全集』(第五巻、昭和25年9月5日発行)、ページ176~188) 【註3】講談社、『天災と国防』(2011年6月9日発行、ページ9~24)